2　三条実美公事蹟絵巻　田中有美（詞 東久世通禧）　二十四巻

絹本着色　明治三十四年（一九〇一）
縦三三・〇
長六六八・七～八五二・二

幕末の宮中において尊王攘夷派公家の中心として活動し、維新後は太政大臣として明治天皇を支えた、三条実美（一八三七～九一）の一代絵巻。「岩倉公画伝草稿絵巻」（作品番号1）に続き、明治二十六年（一八九三）に再び田中有美がその制作を拝命し、およそ八年間の歳月をかけて全二十四巻の絵巻を完成させた。「岩倉公画伝草稿絵巻」は詞書がなく、簡易的な表装で仕立てられていたのに対し、本絵巻は東久世通禧の筆による詞書があり、表紙や見返しなどの装飾的な装丁など、絵巻として非常に高い完成度を誇る。

「岩倉公画伝草稿絵巻」が、各人物や建築物などを正確に写実的に描こうという意識が目立ち、やや硬い印象を与えるのに対し、本絵巻は有美が学習してきた古典絵巻の型を柔軟に取り入れている様子がうかがえる。法量は岩倉の絵巻よりも縦寸が小さく、モティーフが散漫に散らされることなく凝縮してまとめられ、絵巻らしい横への展開が繰り広げられている。画面の上下に配された雲型の霞が、鑑賞者の視線を横へと導く効果をあげている。

主人公である三条の描写は、実際の顔に似せて描くというよりも、平安、鎌倉絵巻によく見られる引目鉤鼻で色白の、王朝人の様式的な面貌表現に近い。東久世通禧や四条隆謌など三条以外の七卿、その他毛利慶親、西郷隆盛、坂本龍馬などの各人においても、岩倉の時のような実際の面相に似せようとする意識はさほど感じられず、絵巻に描かれたその他の人々の柔和な雰囲気との統一性を優先しているように感じられる。

細部のモティーフまで緻密に描き込む点は岩倉の絵巻と同様であるが、室内の屏風や襖、床の間の掛幅などの画中画の描写にはさらに力が込められ、琳派風の草花図から南画風の山水図、漢画風の水墨画など多彩なバリエーションが認められる。

絵巻は三条の誕生、幼少期の逸話から丹念につむがれ、文久三年（一八六三）八月十八日の政変によって京都から長州へと下る七卿落ち、その後の太宰府への移送、そして復職して明治政府の要職につき明治二十四年に没するまでの波瀾万丈な生涯が劇的に描かれている。全二十四巻の本絵巻の概要は次の通りである。

【第一巻】〈第一段〉天保八年二月八日、梨木町邸に生まれる。〈第二段〉新田村の農家において幼少期を過ごす。〈第三段〉三条邸に戻り後藤一郎に読書を学ぶ。〈第四段〉兄公睦の病を看護する。

【第二巻】〈第一段〉嘉永七年二月、家臣の森寺富田両人の建議書を父実万より示される。〈第二段〉安政元年十一月、賀茂神社臨時祭において舞人を務める。〈第三段〉安政五年十二月、上津屋村に幽居する実万のもとに勅使として遣わされる。〈第四段〉安政六年十月、臨終の実万を看取る。

【第三巻】〈第一段〉文久二年十月、勅使として江戸に下向する。〈第二段〉江戸の旅館において将軍家茂の病の回復を待つ。

【第四巻】〈第一段〉江戸城において将軍に勅書を奉じる。〈第二段〉十二月、国事掛となり志士らの建白を受ける。

【第五巻】〈第一段〉文久三年二月、勅使となり一橋慶喜らへ攘夷決行の期限を迫る。〈第二段〉四月、石清水八幡宮行幸に供奉する。

【第六巻】〈第一段〉五月、賊の襲撃を逃れる。〈第二段〉八月、大和行幸に向けて支度を進める。〈第二段〉八月十八日の政変が起き、参朝を止められる。〈第三段〉

【第七巻】〈第一段〉妙法院へ六卿とともに退く。妙法院において論議し、長州に落ち延びることを決する。〈第三段〉十九日夜、暴風雨の中周防に向かう。

【第八巻】〈第一段〉二十一日、兵庫の旅館において髷を落とし服装を替え改称する。〈第二段〉二十三日、備後鞆津の保命酒店に寄り、密使を諸藩に派遣する。〈第三段〉水野丹後と渕上謙蔵、公の密書を津和野藩主亀井茲監に渡す。

【第九巻】〈第一段〉二十七日、鞆津を発し周防国都濃郡徳山に到達する。〈第二段〉夜半雨を冒して三田尻に向かう。〈第三段〉九月、奇兵隊ら公に参謁する。

【第十巻】〈第一段〉毛利慶親の訪問を受ける。〈第二段〉十月、澤宣嘉ひとり旅館より脱走する。〈第三段〉五卿とともに茶臼山にて猟を行う。

【第十一巻】〈第一段〉元治元年三月、矢原川原での演習を視察する。〈第二段〉十月、清岡半四郎、千屋菊次郎を密使として江戸に遣わす。〈第三段〉十一月、江戸の水戸邸において半四郎ら密書を武田正生に託す。

【第十二巻】〈第一段〉元治元年元日、諸士の賀正を受ける。〈第二段〉三月、馬関の亀山八幡祠に参詣する。〈第三段〉壇ノ浦の砲台を巡視する。

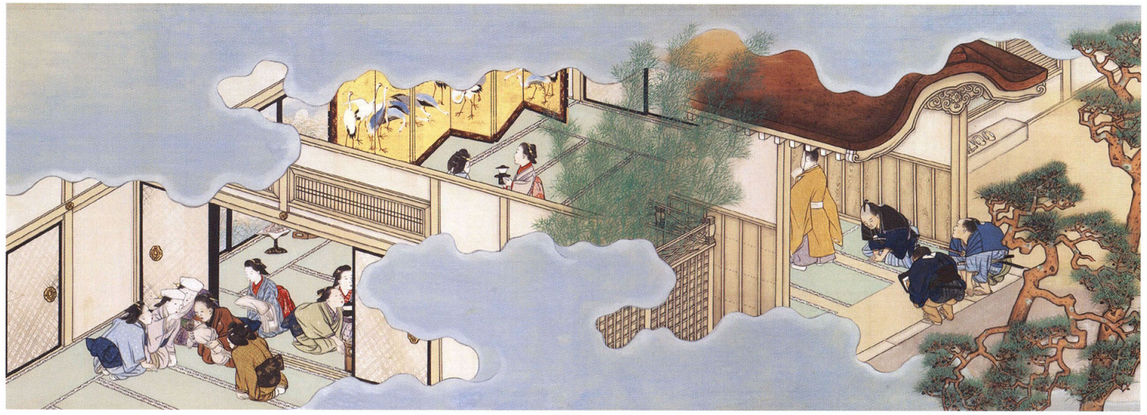
【第十三巻】〈第一段〉五月、赤妻山に詣り錦小路頼徳の霊を祀る。〈第二段〉楠木正成の祭典において祭文を読む。〈第三段〉丹羽正雄らに朝廷への書を託す。

〈第四段〉丹羽正雄ら六角の獄において処刑される。
【第十四巻】〈第一段〉六月、真木保臣らに杯を授け戦勝を期す。〈第二段〉七月、東上を決し毛利慶親より錦の直垂を贈られる。〈第三段〉七月十三日、毛利定広らの軍勢とともに海路より京都に向かう。
【第十五巻】〈第一段〉七月十九日、禁門の変に敗れ真木保臣ら自刃する。〈第二段〉敗戦の報を聞き再び周防に退くことを決す。〈第三段〉毛利慶親の求めを受け三田尻に赴く。
【第十六巻】〈第一段〉八月、毛利定広のもとに馳せて英国との和講について問いただす。〈第二段〉十月、密航による渡欧を企てるが断念する。〈第三段〉十一月、公の命を受け土方楠木左衛門、萩城にて病中の毛利敬親（慶親）に書を渡す。
【第十七巻】〈第一段〉十一月奇兵隊らを率いて長府に移る。〈第二段〉長府に入り功山寺に宿泊する。〈第三段〉赤間関へ出陣する高杉晋作、公に謁見する。〈第四段〉諸隊の力士に命じて角力をとらせる。
【第十八巻】〈第一段〉中岡慎太郎、早川養敬の従者として豊前小倉に到着する。〈第二段〉中岡慎太郎、西郷吉之助に五卿福岡藩西航の是非を問う。〈第三段〉慶応元年正月、川上彦斎、長州への滞留を主張する。〈第四段〉福岡に向けて出航する。
【第十九巻】〈第一段〉筑前赤間の旅館に幽閉される。〈第二段〉二月、太宰府天満宮延寿王院に寓し、連歌を奉納する。〈第三段〉四月、幕吏塚原但馬守、小倉に至り海岸を視察する。
【第二十巻】〈第一段〉太宰府において従士らの剣・騎馬術の修練を奨励する。〈第二段〉慶応二年三月、幕府目付小林甚六郎、太宰府に至る。〈第三段〉三月、小林甚六郎の到着を前に従士らに東上せざるの決心を示す。〈第四段〉黒田嘉右衛門、小林甚六郎と対面し五卿の護送を阻止する。
【第二十一巻】〈第一段〉七月、公等に謁した小林甚六郎、甚だ畏まる。〈第二段〉筑前の医陶山一貫を訪い父実万の書を見る。〈第三段〉慶応三年正月、宝満山にて小松を採り陶山一貫に賜う。〈第四段〉八月、戸田雅楽を長崎に遣わし外国の事情を探らせる。
【第二十二巻】〈第一段〉京都において戸田雅楽、坂本龍馬らと朝廷総攬の制を画する。〈第二段〉六月、黒田斉溥、五卿の取締りを厳重にする。〈第三段〉四月、薩摩藩士伊集院金次郎、酒に酔って公の宿舎で暴れる。〈第四段〉土方楠左衛門に帰京の支度を命じる。
【第二十三巻】〈第一段〉十二月、帰京を前に太宰府天満宮へ太刀を奉納する。〈第二段〉十二月二十六日、大坂より淀川を遡上し京都へ向かう。〈第三段〉二十七日、自邸にも寄らず直ちに参内する。〈第四段〉二十八日、先帝の山陵に参る。
【第二十四巻】〈第一段〉明治四年七月、太政大臣を拝命する。〈第二段〉明治六年、橋場の別荘に於いて療養する。〈第三段〉明治二十四年二月、病床の公を慰問するため三条邸へ行幸。

絵巻の制作経緯をまとめると、まず「岩倉公画伝草稿絵巻」の解説で触れた通り、明治十六年岩倉具視没後ほどなくして、その事蹟の取り調べと年譜編纂事業が開始された。これに続いて、同二十一年には岩倉と並び明治天皇にとって欠かせぬ存在であった三条実美についても、いまだ存命中ながらすでにその事蹟取り調べが開始され、翌年には実美の父実万を含めた三条父子の生涯の経歴を編纂する三条内府父子行実取調掛が発足した。二十四年からは宮内省図書寮がこの編纂事業を引き継ぎ、十年近い歳月をかけて明治三十三年に「三条実美公年譜」全二十九巻が完成し、翌年その上製本が献上された。そして、この年譜編纂事業の進行過程で、岩倉の時と同様、三条実美の事蹟を題材にした絵巻制作が田中有美に命じられたのである。

いくつかの関連資料を見る限り、有美に宮内省より制作が命じられたのは明治二十六年、それから有美は何年にもわたって制作に取り組み、三十四年の年末には完成させたようである。『明治天皇紀　第十』明治三十四年十二月二十三日条には「是れより先、三条実美事蹟絵巻物成れるを以て、之れを上りて乙夜の覧を乞ふ、都て二十四巻、画は田中有美の画く所、詞書は東京帝国大学文科大学教授黒川真頼起草し、伯爵東久世通禧修正浄書す、是の日通禧以下関係者に金品を賜ひて、並びに之れを労したまふ」とある。絵巻の完成は新聞等でも報じられ、さらに明治四十年には内容を若干修正し『三条実美公履歴』という名の版本として刊行された。

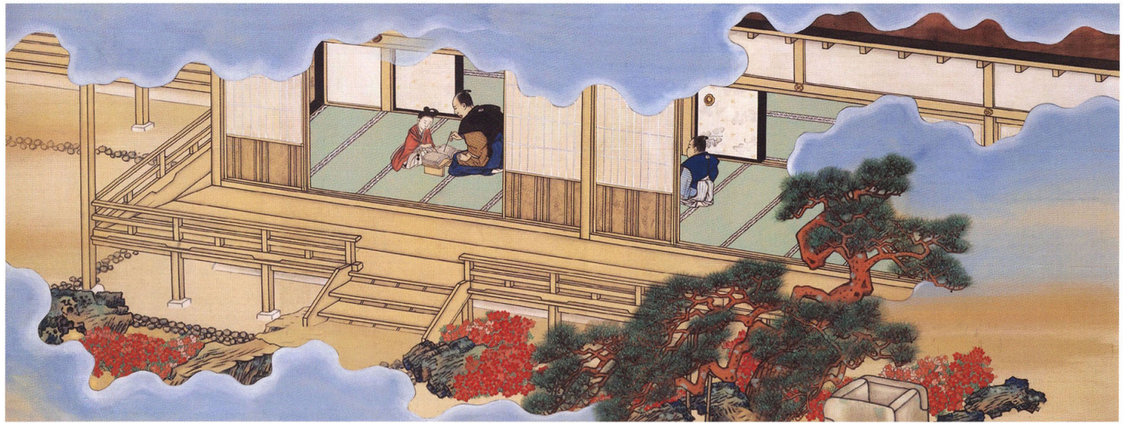
巻姿



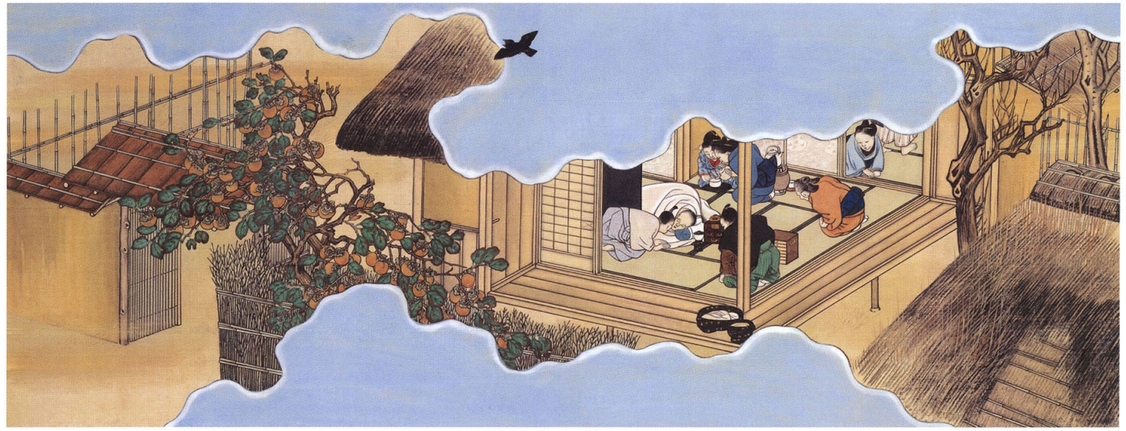
天保8年（1837）2月8日、誕生。　第1巻第1段

洛東新田村の農家に預けられ幼少期を過ごす。　第1巻第2段

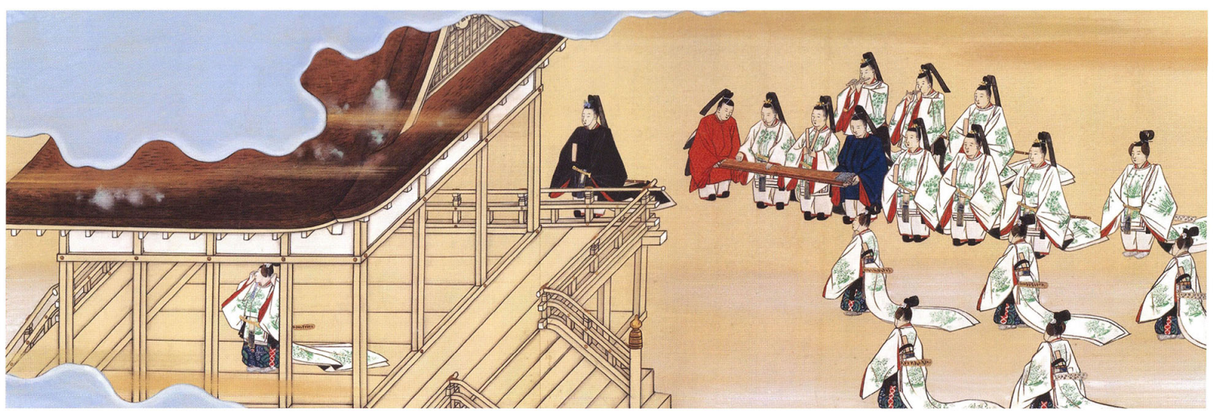
安政元年（1854）11月、賀茂神社臨時祭の舞人に選ばれる。　第2巻第2段



三条邸にもどり修学に励む。読書の師は後藤一郎（後の富田基建）。　第1巻第3段

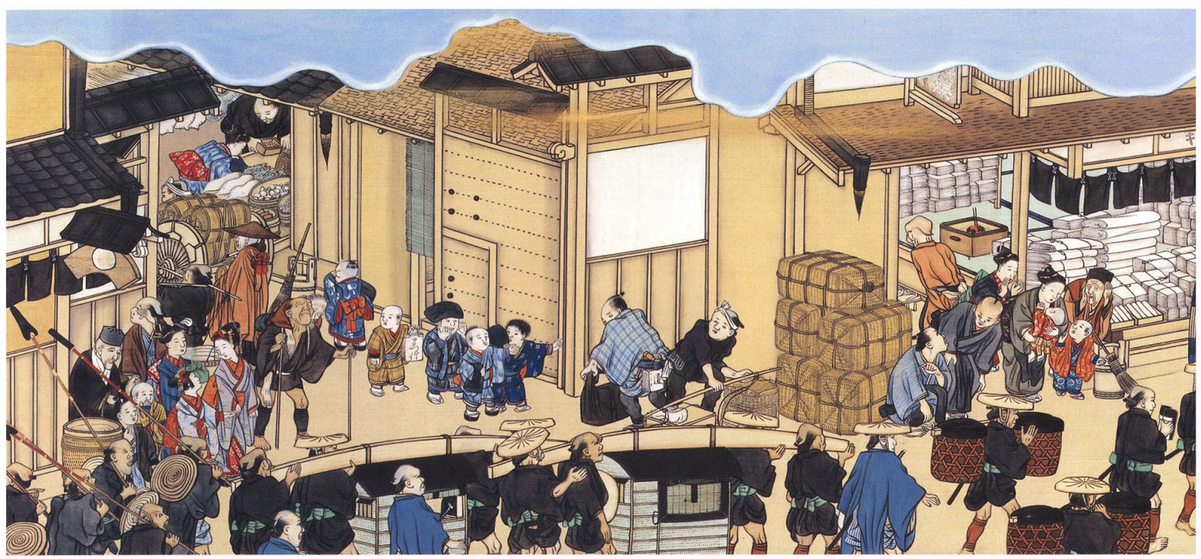


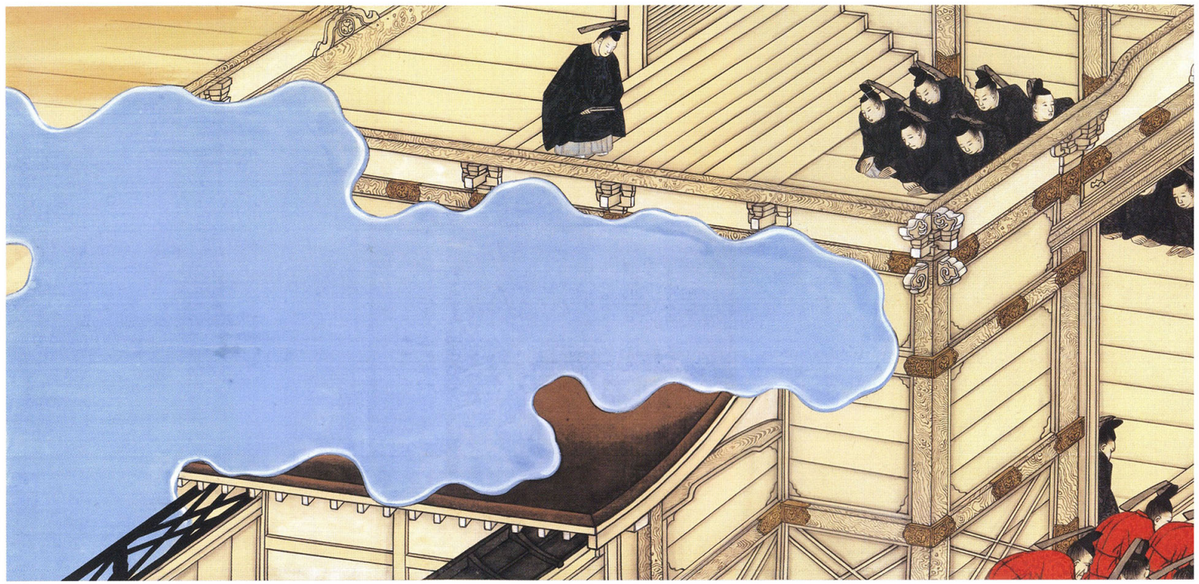
安政6年（1859）10月、危篤の父実万を看護し、最後の言葉を聞き届ける。　第2巻第4段



舞殿にて東遊一の舞を務める18歳の三条

文久2年（1862）10月、幕府への攘夷実行、親兵選貢の勅命を伝える勅使として、姉小路公知とともに江戸へ下向する。　第3巻第1段



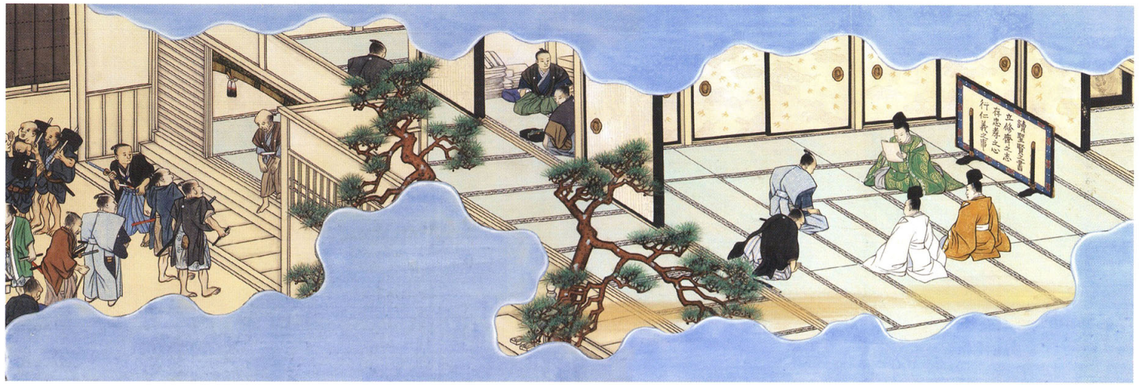


将軍家茂自ら玄関にて出迎える。

勅使三条の到着

文久2年（1862）11月27日、江戸城入城。　第4巻第1段

将軍へ勅書を奉じる。



文久2年（1862）12月、国事掛となった三条のもとへ尊皇派の諸藩主や志士らが建白書を持ち次々と訪れる。　第4巻第2段

文久3年（1863）2月、一橋慶喜、松平慶永、松平容保、山内豊信の滞在する東本願寺に押しかけ、攘夷実行の期日決定を強く迫る。　第5巻第1段

文久3年4月11日、石清水八幡宮へ行幸。将軍家茂は病と称し、代理として一橋慶喜が供奉する。　第5巻第2段

御用掛として供奉する三条

憤慨し三条邸に押しかける親兵ら数千人

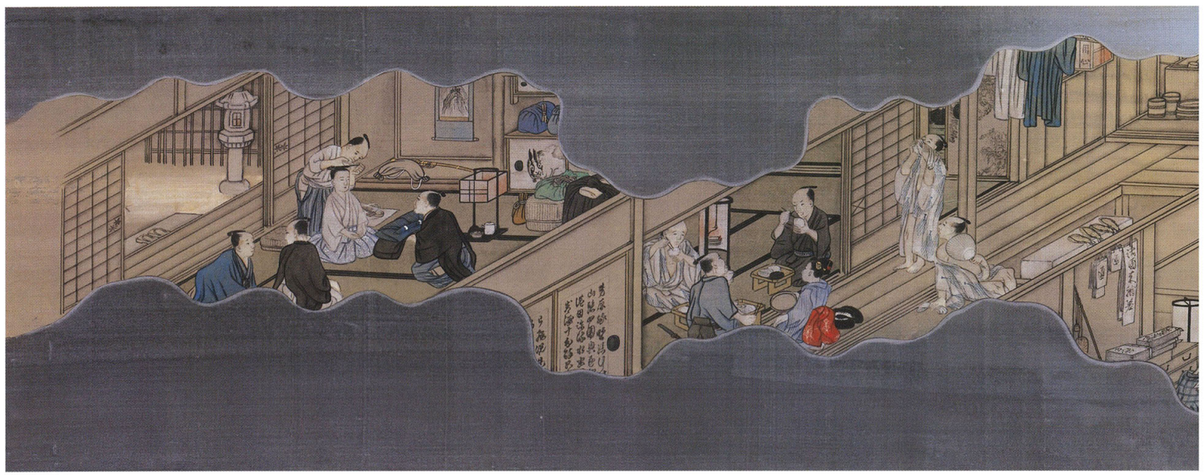
文久3年（1863）8月18日、公武合体派による政変が起き三条らは突如参朝を禁じられ、長州藩は堺町門の警備を解かれる。　第6巻第3段

関白鷹司輔熙に復職を請うが叶わず、やむなく妙法院に退く。　第7巻第1段

妙法院において密議を行い、長州へ落ち延びることを決する七卿　第7巻第2段
（三条のほか、三条西季知、東久世通禧、壬生基修、四条隆謌、錦小路頼徳、澤宣嘉）

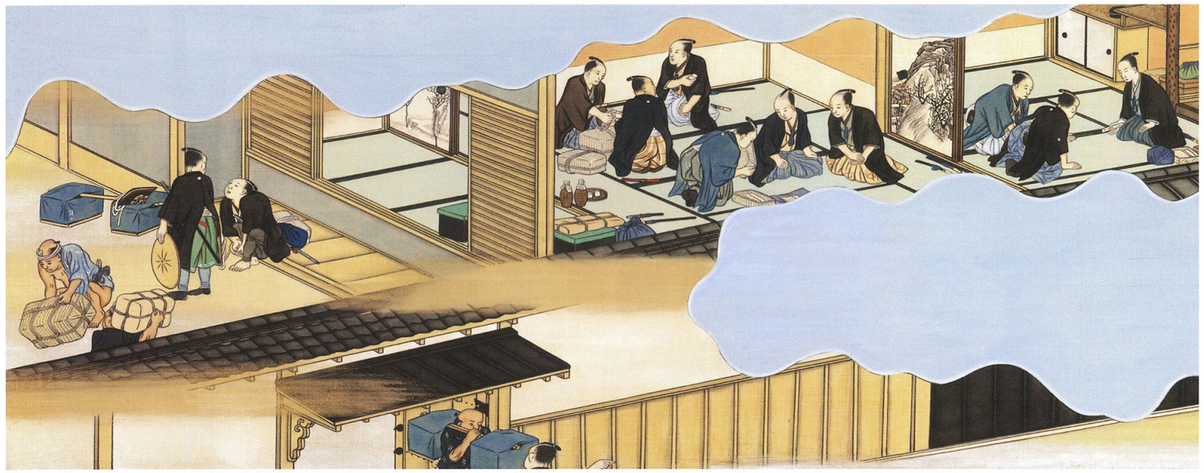
19日深夜、大雨の中長州へ向けて京を立つ（七卿落ち）。　第7巻第3段

毛利元純（清末藩主）、吉川経幹（岩国藩主）の率いる二千人余りの護衛とともに蓑笠に草履で竹田街道を行く七卿



髷を落とし服装を変え梨木誠斎と改称。京から駆けつけた家臣戸田雅楽はその変貌した様に驚き涙を流す。

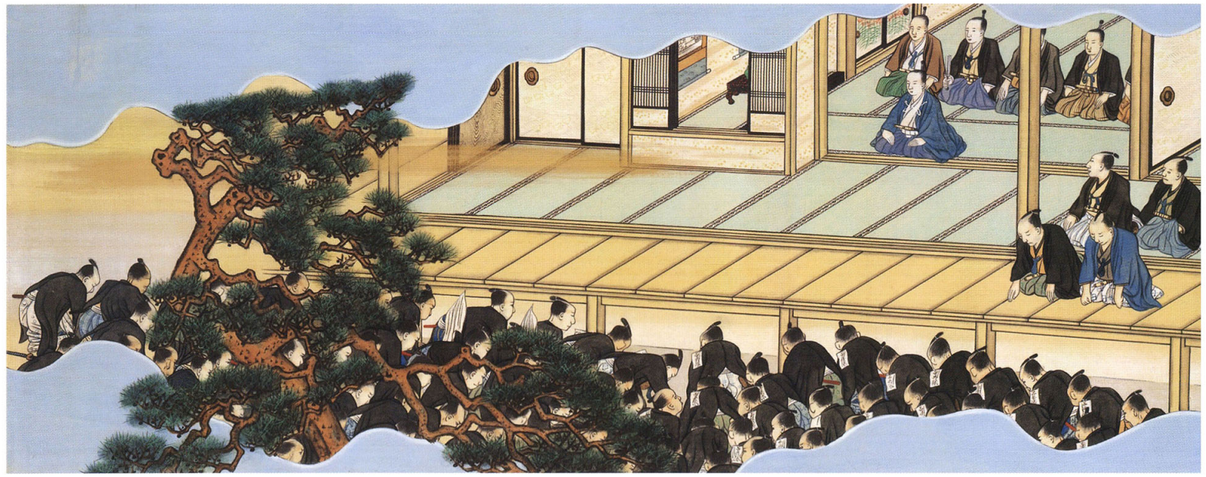
文久3年（1863）8月21日、兵庫の旅館に投宿。　第8巻第1段



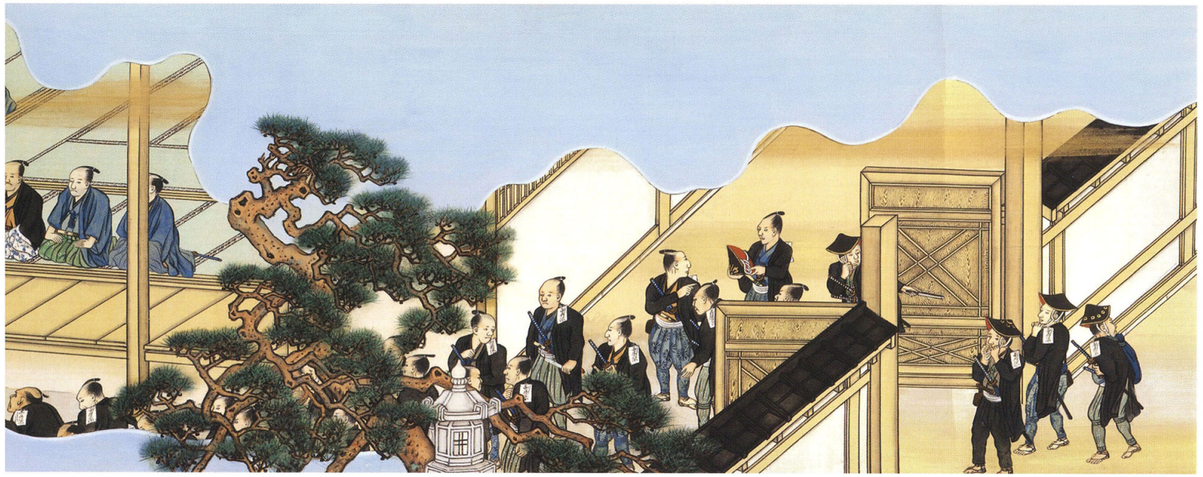
密書を携え広島に向けて旅立つ土方楠左衛門（久元）と清岡半四郎（公張）　広島藩、津和野藩に密使を遣わす。

8月23日、備後国鞆津の保命酒店を旅館とする。　第8巻第2段

文久3年（1863）8月27日、周防国都濃郡徳山に到着する。　第9巻第1段



庭前に整列する滝弥太郎、川上弥一らの率いる奇兵隊250人

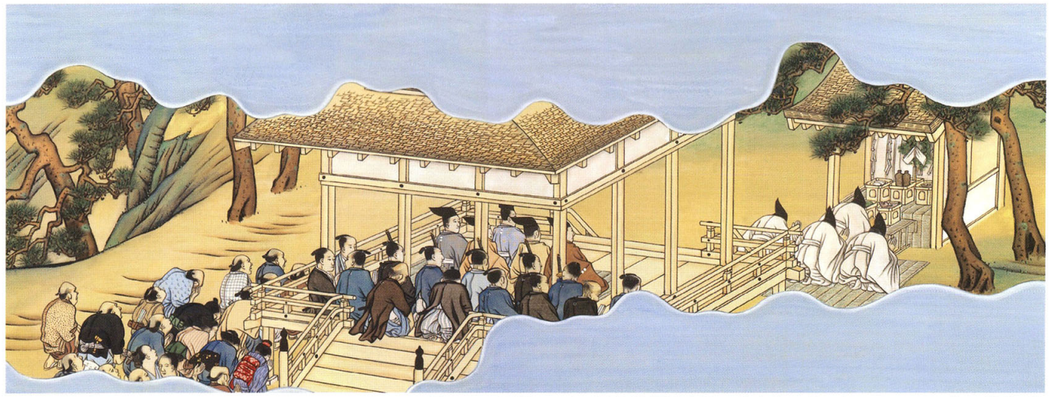


文久3年（1863）9月、招賢閣において奇兵隊に謁す。　第9巻第3段

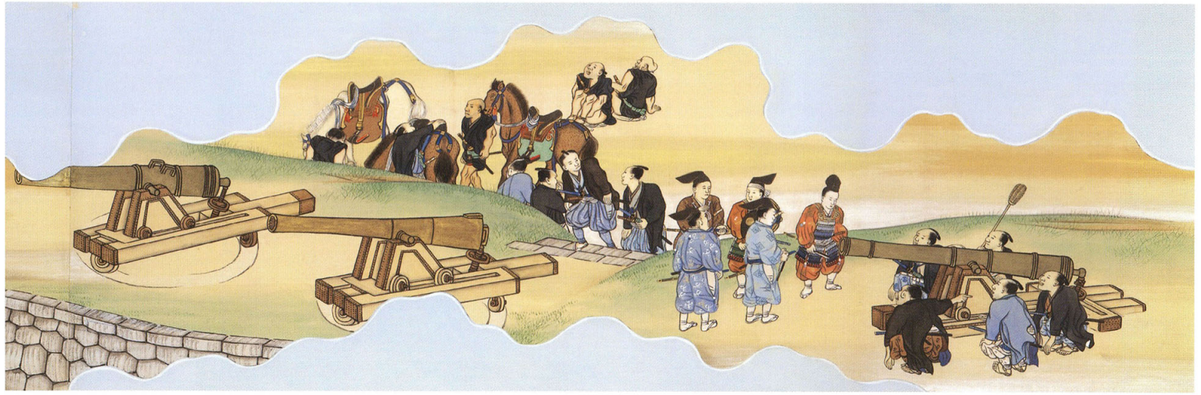
元治元年（1864）3月5日、矢原川原で軍事演習を視察する。

第11巻第1段

毛利慶喜はじめて七卿のもとに参上し、兵を率いて東上する計画を練る。　第10巻第1段

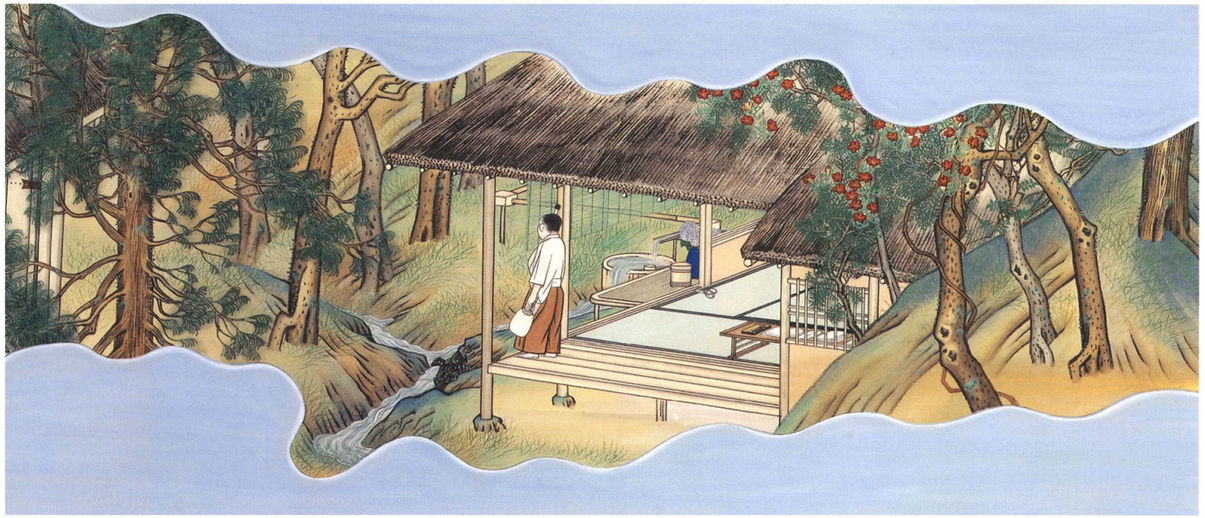


4月15日、七卿の一人、姉小路頼徳病没。赤妻山に葬られる。　第13巻第1段

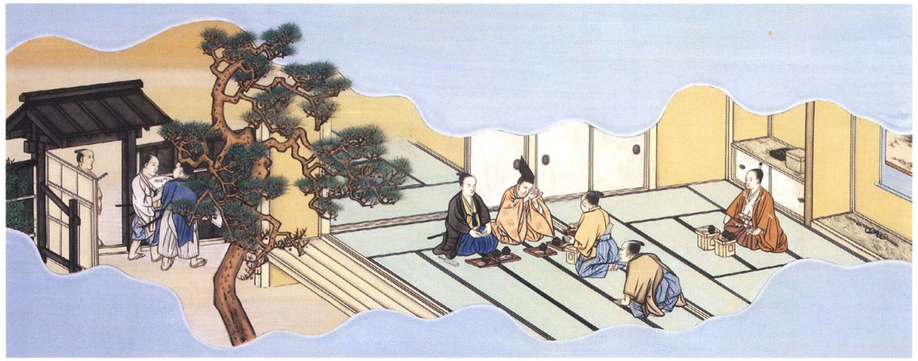


3月28日、壇ノ浦の砲台で鉄砲の演習を視る。　第12巻第3段

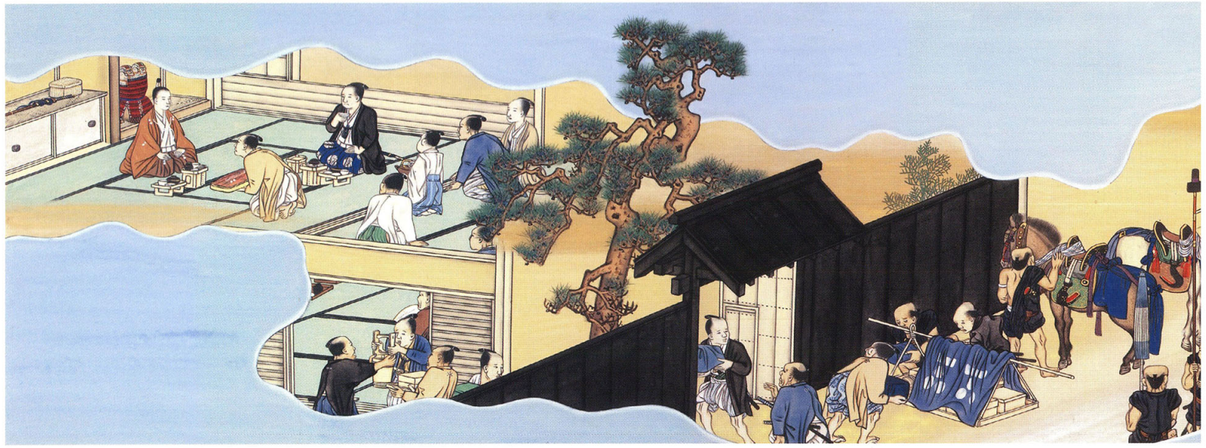
元治元年（1864）1月、三条の朝廷にあてた手紙を携え京に発つ丹羽正雄（三条家家臣）と河村季輿（三条西家家臣）。二人はこの後6月にも京に上るが、幕吏に捕らえられ処刑される。



しばし氷上山真光院にて閑居する。　第13巻第3段



4月、挙兵して京へ東上することを決意。先発する真木保臣に盃を授け戦勝を期す。　第14巻第1段

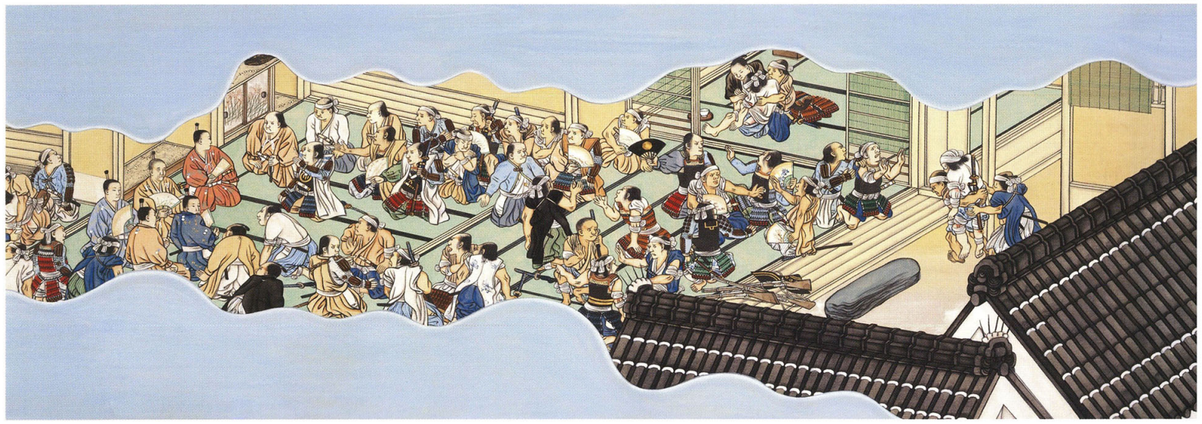


7月10日、自らも東上する意を決した三条のもとを毛利慶親が訪れ、餞別の宴を催し錦の直垂を贈る。

第14巻第2段

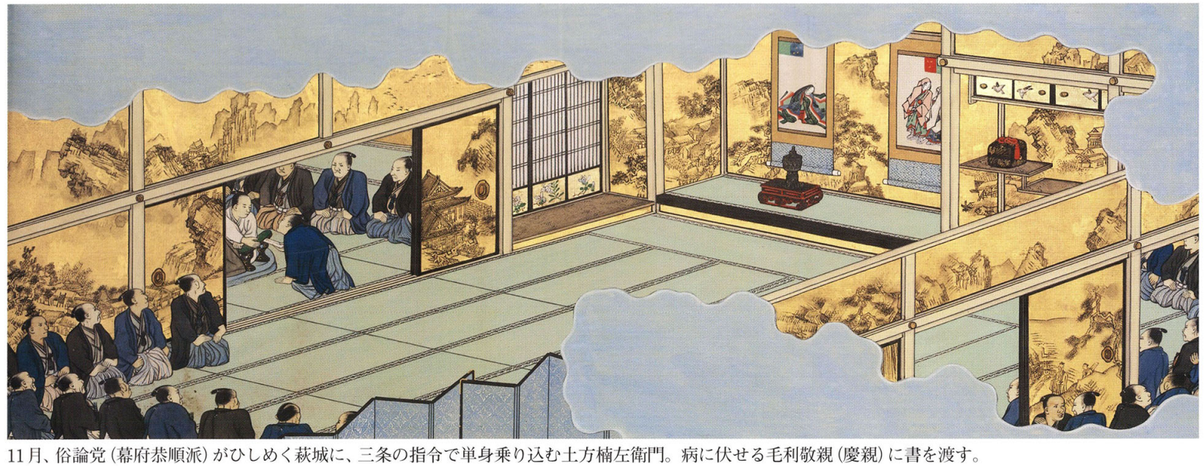
元治元年（1864）7月13日、毛利定広の率いる三万人の兵とともに海路より京へ発つ。　第14巻第3段

元治元年（1864）7月19日、真木保臣らは禁門の変を起こすも会津、薩摩藩に敗れ天王山で自刃する。　第15巻第1段



敗戦の報を聞き衆議の結果、周防に退くことを決す。

備後国鞆津まで逃れてきた長州藩の兵士たち　第15巻第2段



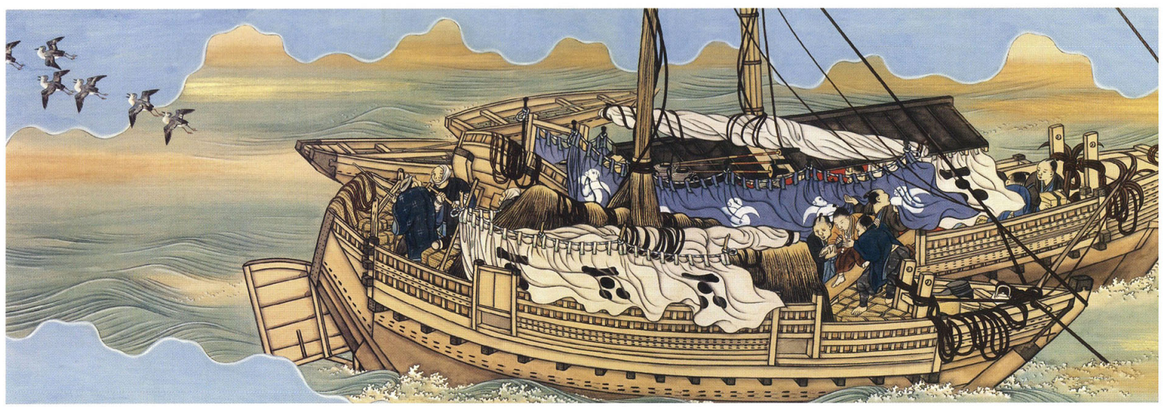
11月、俗論党（幕府恭順派）がひしめく萩城に、三条の指令で単身乗り込む土方楠左衛門。病に伏せる毛利敬親（慶親）に書を渡す。

第16巻第3段

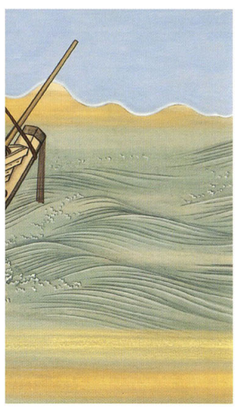
元治元年（1864）11月15日、奇兵隊ら二千人とともに湯田を発し長府に向かう。　第17巻第1段

17日、長府手前で母衣を来た騎馬兵が先に進むことを阻むが、これに応じず長府に到る。

歩き通してようやく長府の功山寺に到着する。従士らは疲労と空腹から先を争って仏前の供物をほおばる。　第17巻第2段

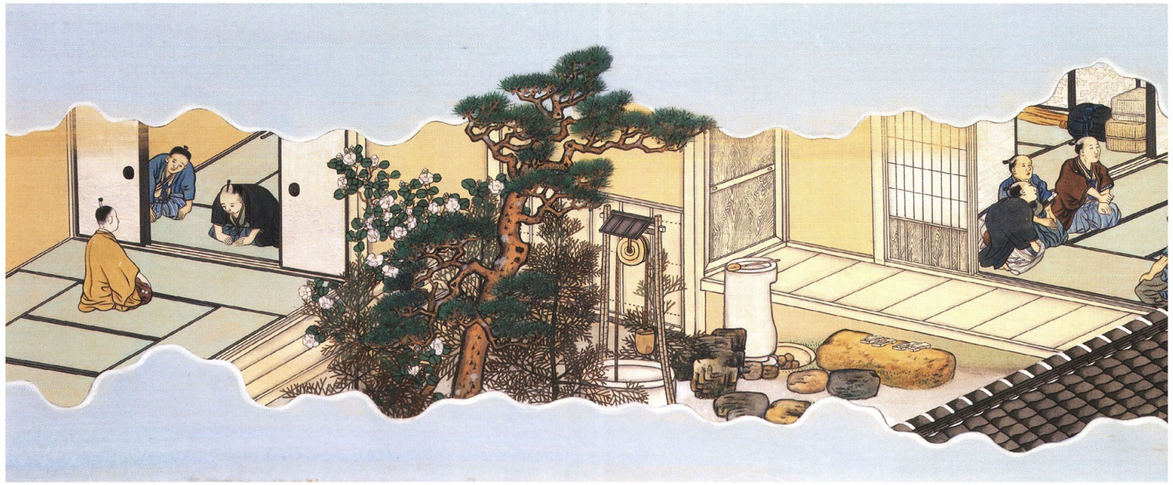


太宰府移転を決し、慶応元年（1865）1月、馬関を発する。途上の変を警戒し雑兵の船に身を隠す。

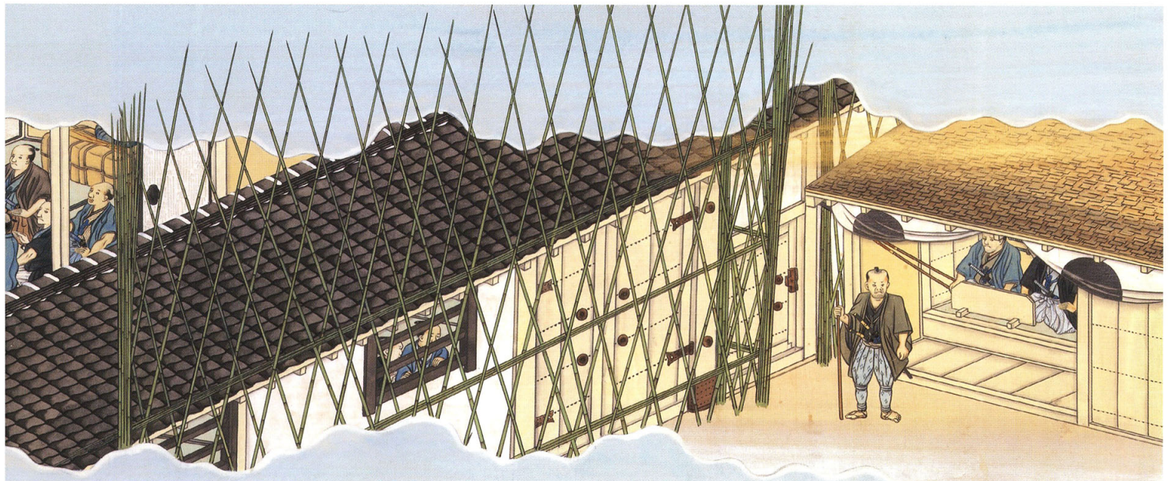


第18巻第4段

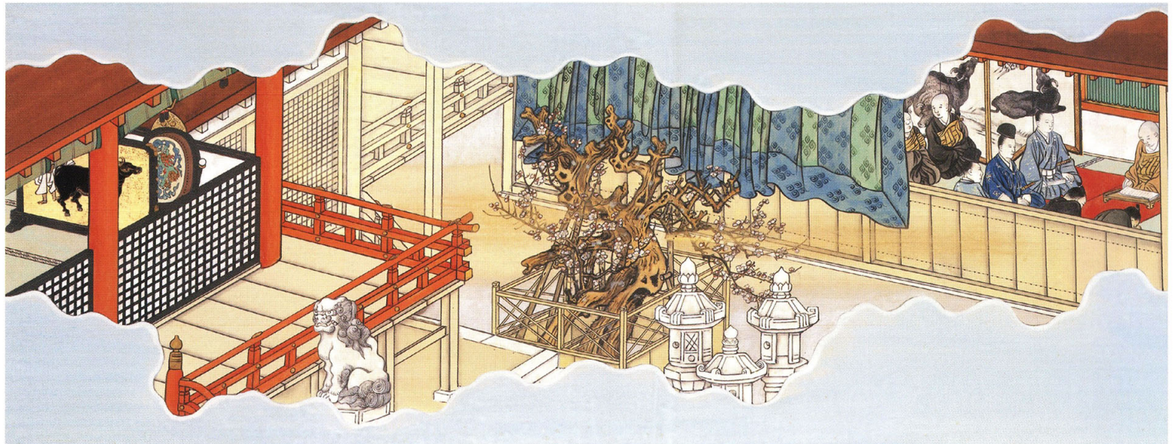
五卿の太宰府移転をめぐり激しい議論が交わされる。　第18巻第3段



拝謁に参上した西郷吉之助（隆盛）の働きにより待遇が改善され自由の身となる。



筑前の赤間駅に到着するが、旅館に幽居の身となる。　第19巻第1段

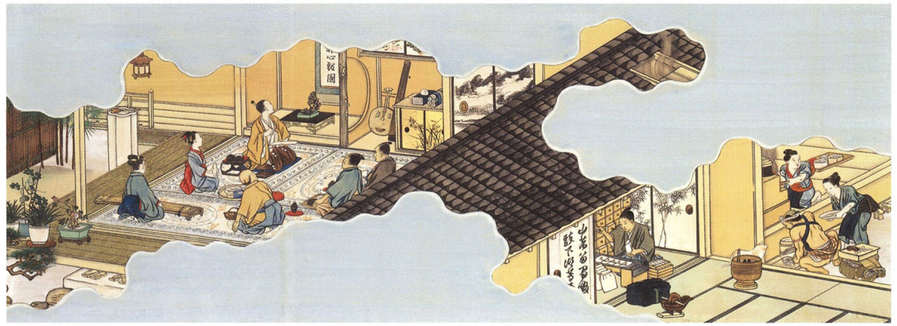


17日間に渡り天下泰平聖躬安穏の祈祷が行われ、宮司らが東西二廊に集まり連歌を奉納。三条らも参拝し、ともに連歌を詠む。

慶応元年（1865）2月、太宰府の延寿王院に寄寓する。　第19巻第2段

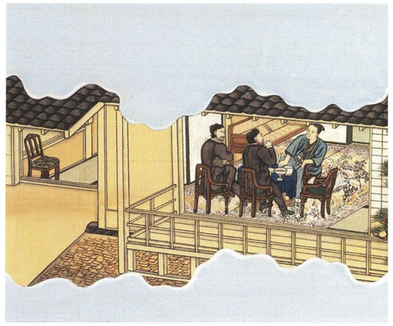
三条、三条西、四条、壬生の四卿（東久世は病気のため欠席）、小林甚六郎に謁す。　第21巻第1段

幕府より五卿の監視役として派遣された目付小林甚六郎が博多に到着したとの報を受け、従者らに自身の決意を告げる。　第20巻第3段

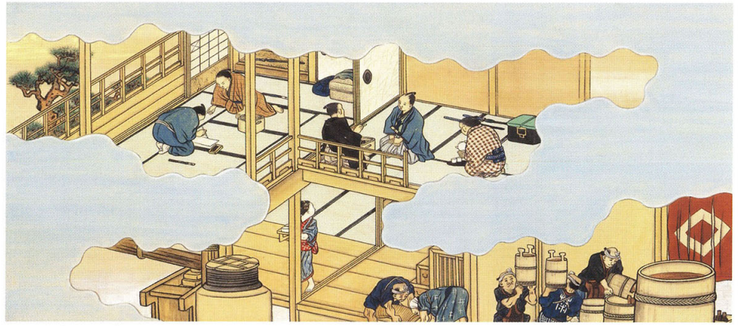


筑前の医陶山一貫邸にて父実万の「赤心報国」の書を目にする。　第21巻第2段

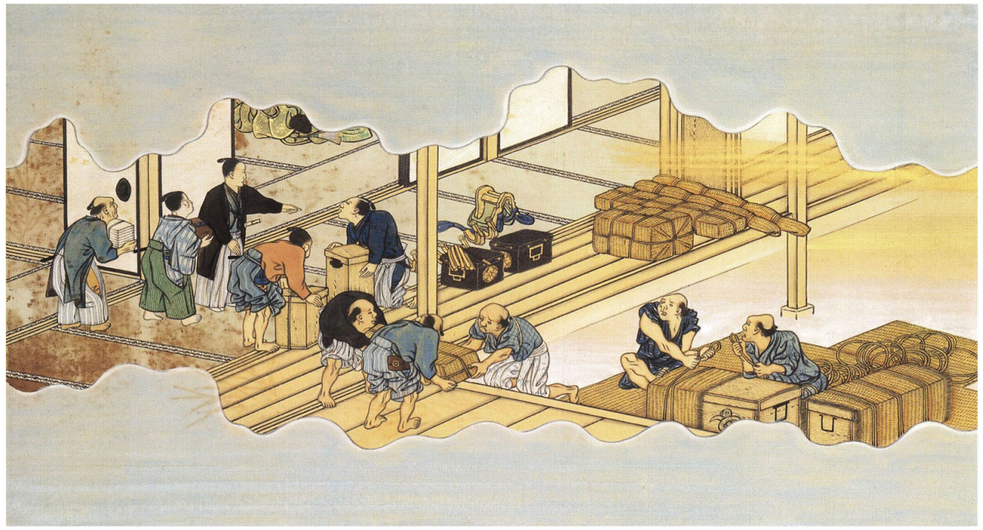
第21巻第4段



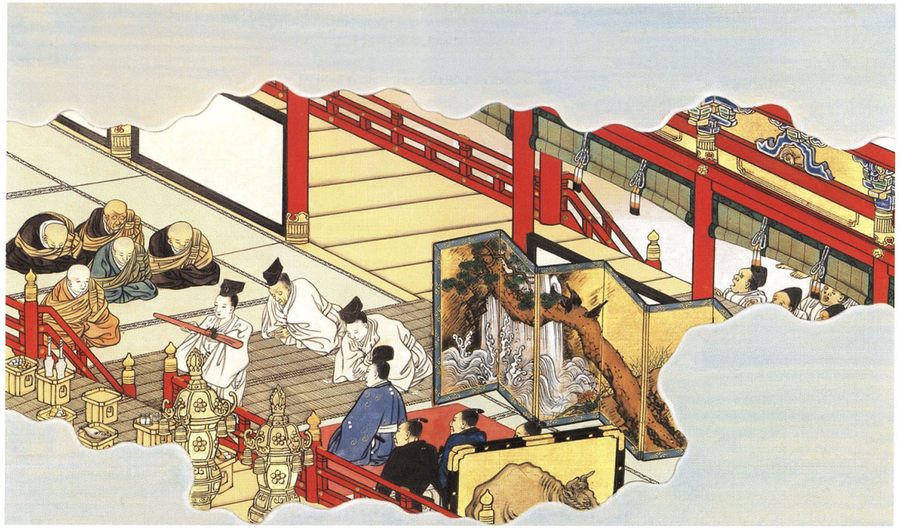
長崎で米国領事ウォールドらに面会し、
諸外国の事情を探る戸田雅楽



京都の下宿で戸田は、坂本龍馬らと王政復古後の職制案を検討する。　第22巻第1段

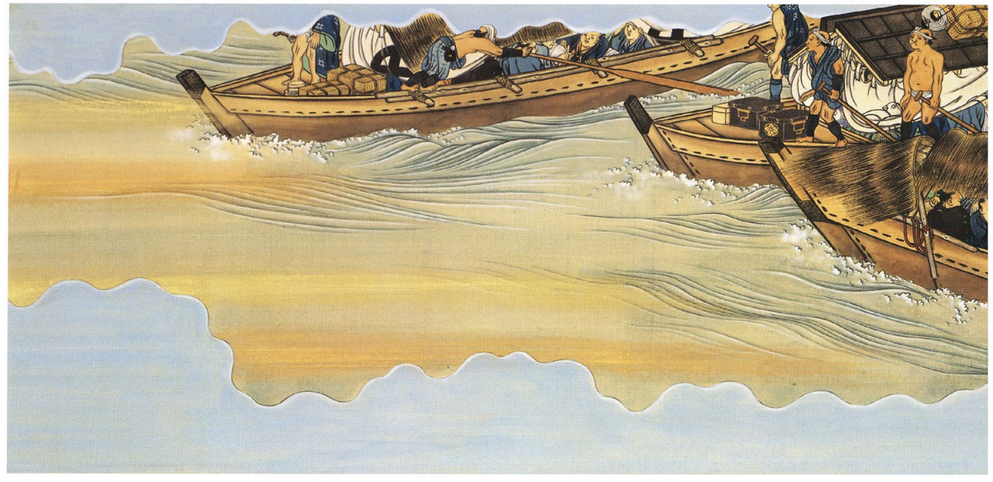


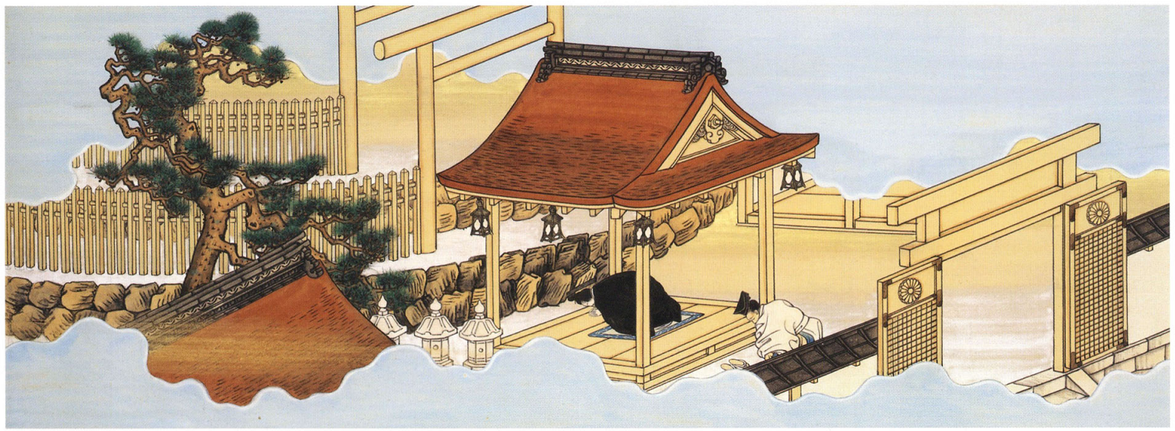
慶応3年（1867）2月、三条らの帰京が決まり荷造りを指示する土方　第22巻第4段



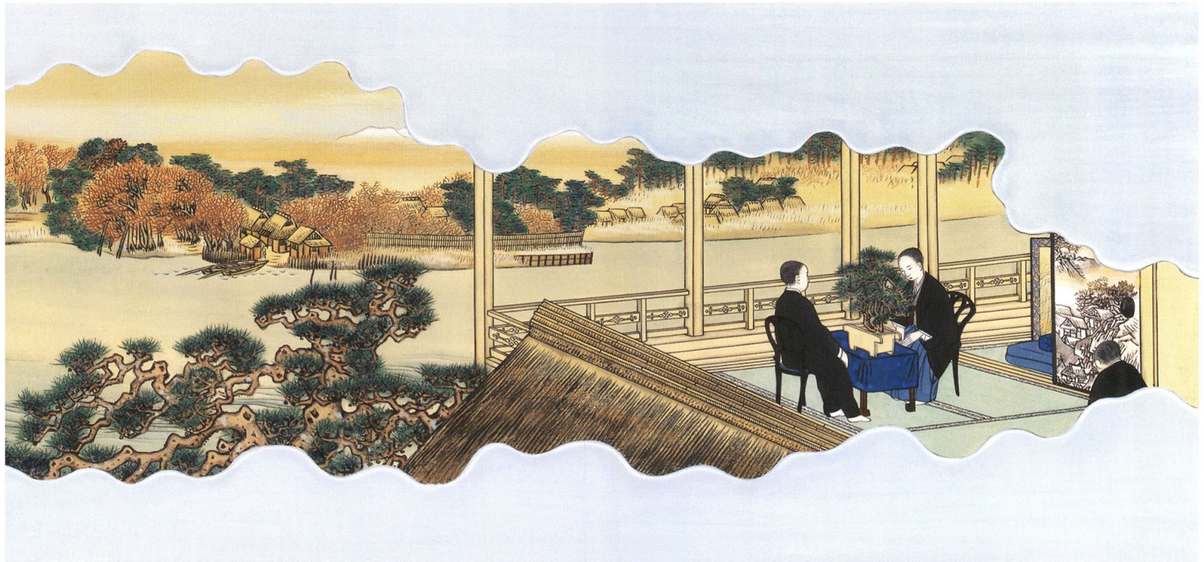
12月18日、復職帰京の勅命を受け、神恩に謝し太宰府天満宮に太刀を奉納する。　第23巻第1段

12月24日、京に向けて博多を発ち、26日、大坂より淀川をのぼる。この時、三条らは不測の事態を用心し、
薩摩藩の用意した船・蘭桂号には乗らず、小舟に乗船した。　第23巻第2段

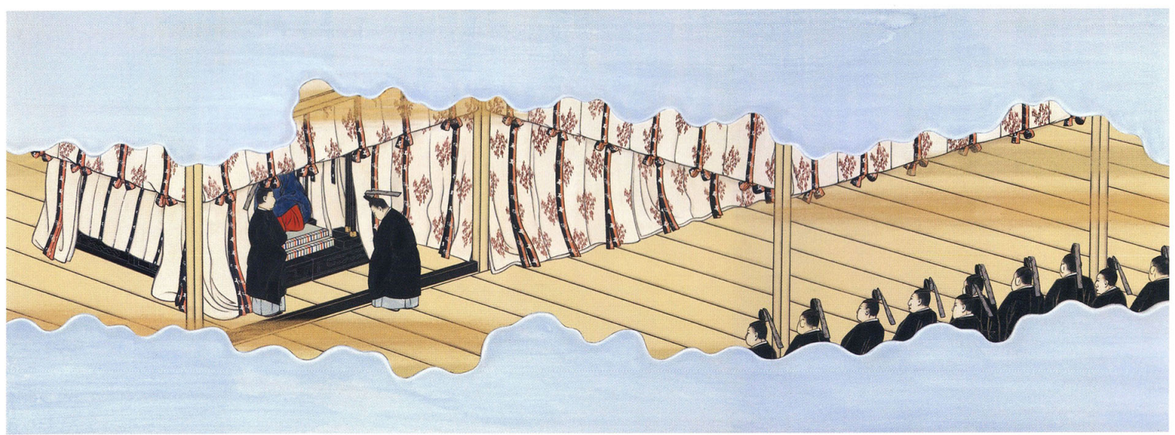




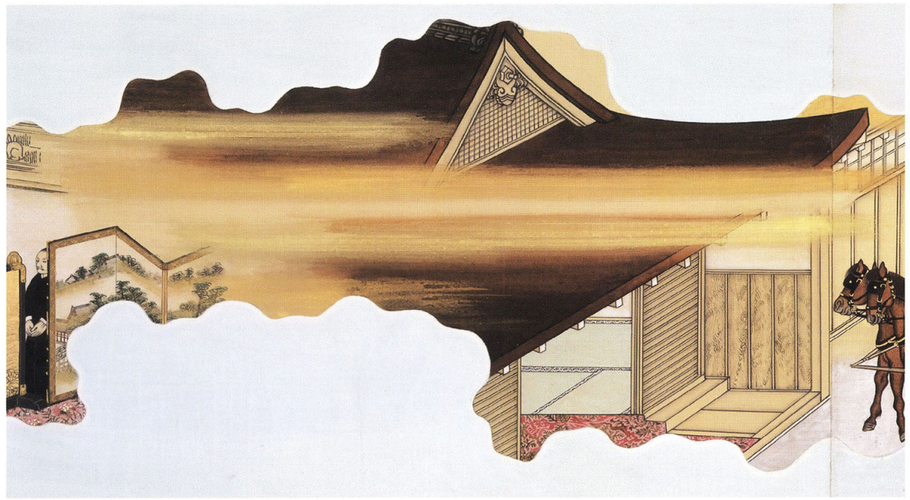
慶応3年（1867）12月27日、文久3年（1863）8月の政変以来ようやく参朝を果たし、翌朝早く先帝（孝明天皇）の山陵に参拝する。　第23巻第4段

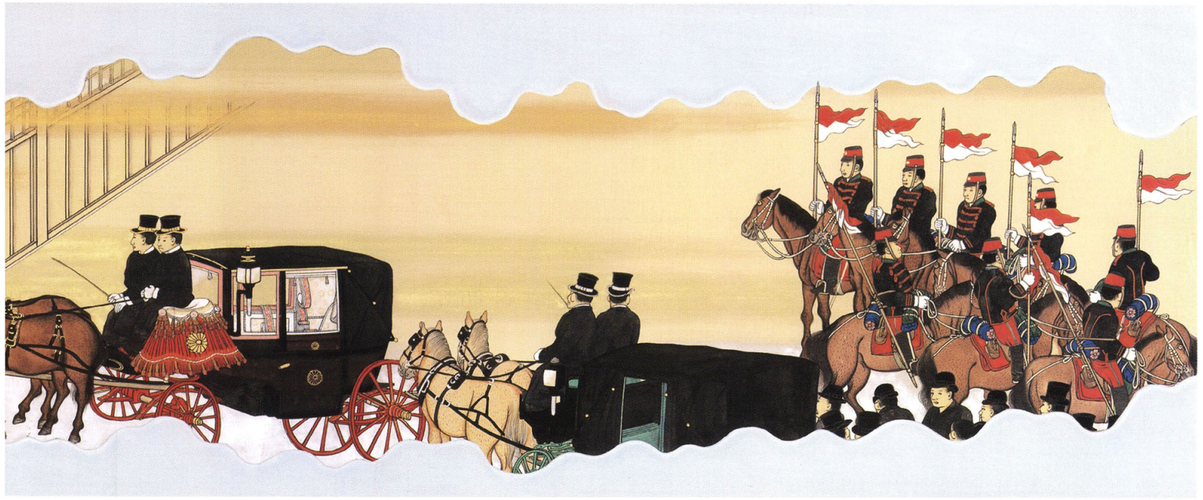


明治6年（1873）、新政府を二分した征韓論争の調停を試みるも、心労から体調を崩し、橋場の別荘にて療養する。この時、明治天皇より御見舞品として盆栽の松を賜る。　第24巻第2段

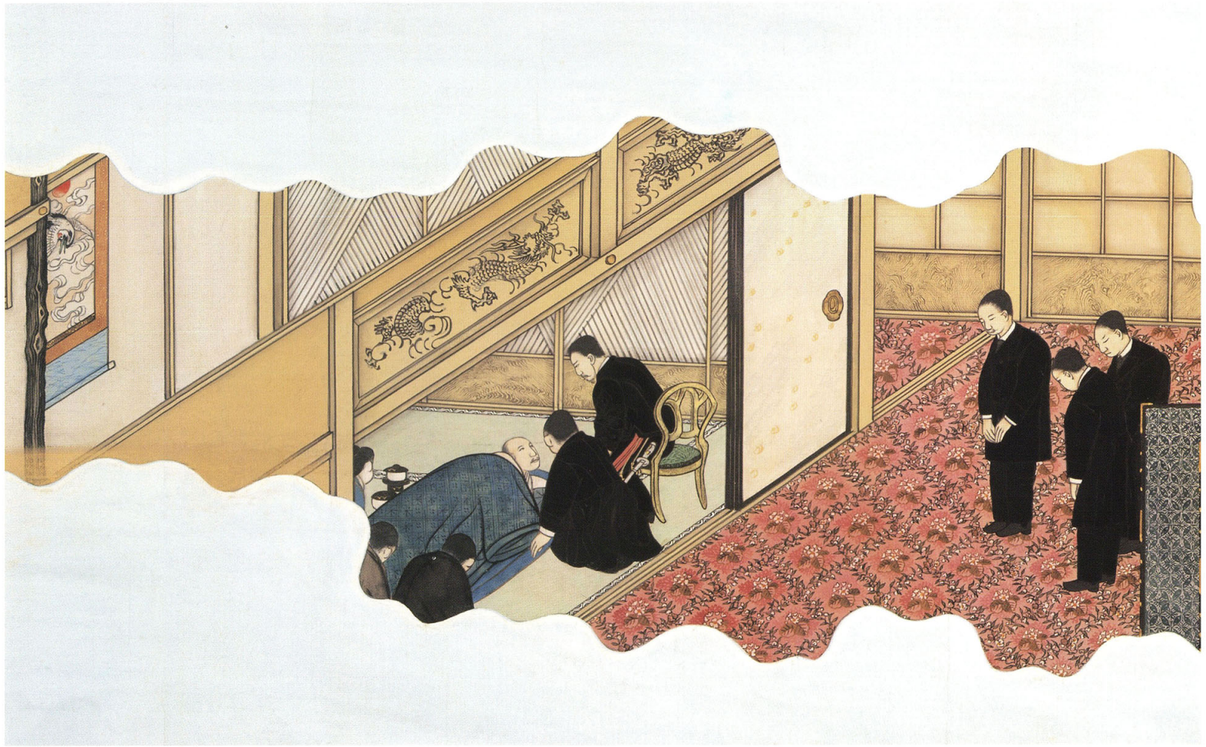


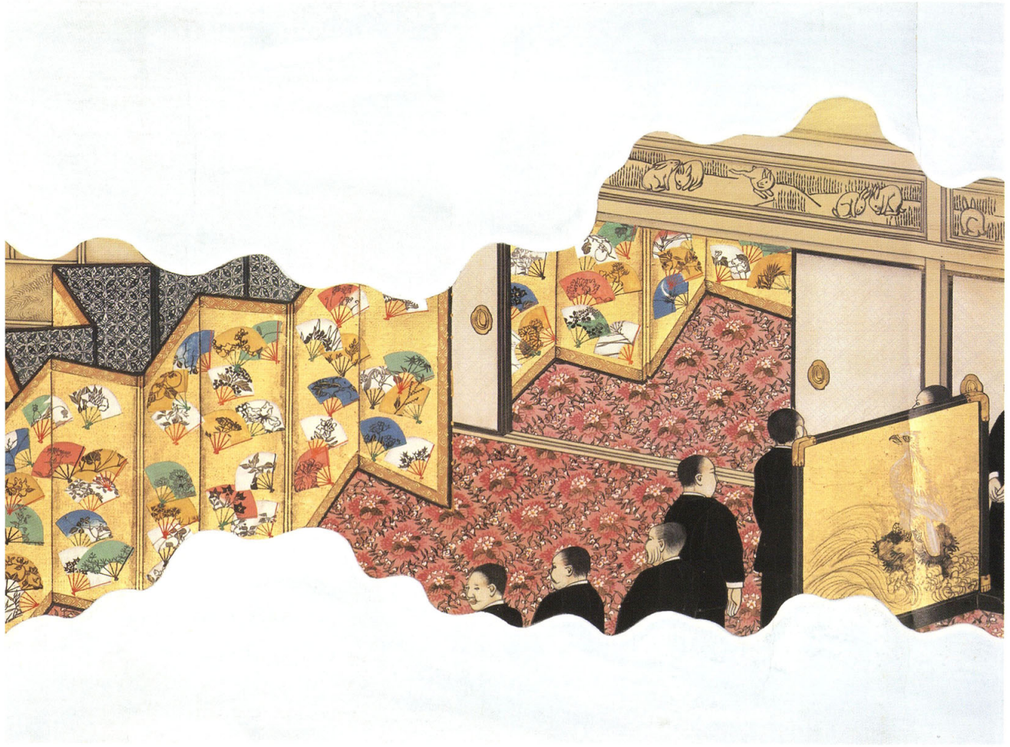
明治4年（1871）7月、太政大臣を拝命する。　第24巻第1段





明治24年（1891）2月28日、病により危篤に陥った三条を見舞うため、明治天皇が三条邸に行幸。　第24巻第3段





・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治天皇を支えた二人
三条実美と岩倉具視 ――一代絵巻が物語る幕末維新
三の丸尚蔵館展覧会図録No.66

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十六年七月十九日発行
© 2014, The Museum of the Imperial Collections